お茶高から世界に羽ばたく！！

UMEHANAs 日経STOCKリーグ 最優秀賞受賞

リポート！

第12回日経STOCKリーグ 表彰式

この春、株式学習のレポートコンテストである日経STOCKリーグ（日経新聞主催）で、本校一年梅組（宮崎）、太田原奈都乃、荒木晶帆・井上彩・末吉陽香・本橋美里のチーム「UMEHANAs」（ウメハナズ）が、全国と海外の日本人中高生・大学生あわせて二四二チームの中から、最優秀賞と金融担当大臣賞に輝いた。三月一〇日、その表彰式が大手町の日経ビルで行われた。（敬称略）

❀　❀　❀

開会のおよそ二時間前、藤澤英子先生率いるUMEHANAsの五人が、取材班より少し遅れて会場に到着した。最優秀賞のチームは表彰式で提出レポートのプレゼンテーションをするので、土曜日の午前中、朝から学校で準備のため土曜日の駆けつけたためだ。五人は緊張の面持ちでリハーサルに臨んだ。UMEHANAsのレポートのテーマは「障害者の力～気づかないなんてMOTTAINAI!!～」、障害者雇用の必要性について触れたものである。

プレゼンで用いるパワーポイントは、手書きのイラストがふんだんに使われており、キーワードを吹き出し形式で表示するなど女子高生ならではの工夫に満ちていた。めいめいがつぎつぎ話題を担当し、ジェスチャーを効果的に取り入れながら印象づけるように話していた。また、レポートの内容だけでなく、調査時の自分たちの体験や感想も織り込むことで、聞く人がレポート作成の過程を追体験するようなプレゼンになっていた。

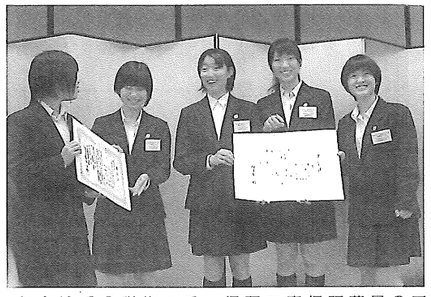
リハーサルの後はビル内のスタジオに移動し、写真撮影となった。初めは慣れない様子だったが、カメラマンの声にあわせて五人でいろいろなポーズをとり、最後は通過する藤澤先生も引っ張り込んで記念撮影をした。写真が載った二月二九日の記事は、現在教員等前に掲示されている。

その後「最優秀賞・ニューヨーク研修旅行の日程説明を受けたのち、表彰式本番。プレゼンでは、働く障害者を実際に目にしたことがある人に挙手を促す場面でパネルハプニングがあった。見たことがあるはずが、思いのほか多かったのだ。しかしそこはお茶高生、即座にせりふの一部をカットし、素知らぬ顔で先を続けた。あまりの鮮やかさに、リハーサルで一度見た記者も気が付かなかったほどである。そしてUMEHANAS独自の企業評価基準「はひふへほの法則」をアクションつきで紹介すると、会場に笑いが起こり終始和やかに進んだ。

表彰式の後は別室で懇親会が開かれた。五人は引っ張りだこで、食事する暇もなく、審査員や他校の教員の方々とお話。実業家の渋澤栄一の玄孫で、審査員をされたシブサワ&カンパニー代表取締役渋澤健さんは、「はひふへほの法則」は株式投資を自分の問題として考えている表れであり、「ほぉぉ～」と感じたと讃えた。記者は彼女たちが休日に企業訪問した食品トレー会社エフピコ（茨城県結城郡）の社員で、表彰式に来てくださった細川さんに五人の訪問時のことを尋ねた。「ちゃらちゃらして『何しに来たの』って感じだったらお説教しようと思っていたけど、会ってみると全然違った。きらきらした目で聞いてくれて、本当に興味をもっているのが伝わってきたんですよ」

❀　❀　❀

レポートを読んで涙した審査員の方も複数いらしたという。UMEHANAsの熱意が多くの人の心を動かした。半年以上にわたる努力の結晶であるレポートは、日経STOCKリーグのホームページに掲載されている。



（一面より）

減点トラブル 細かい？

普段は自由奔放なお茶高だが、輝鏡祭のときは一転、厳しいルールに神経を尖らせることになる。体育祭で減点に泣いた人もいるのではないだろうか。競技などにおける「お茶高ルール」は非常に細かく多岐に渡っているため（減点となる項目は一つの競技につき平均七・三個）、時に混乱を引き起こすこともある。

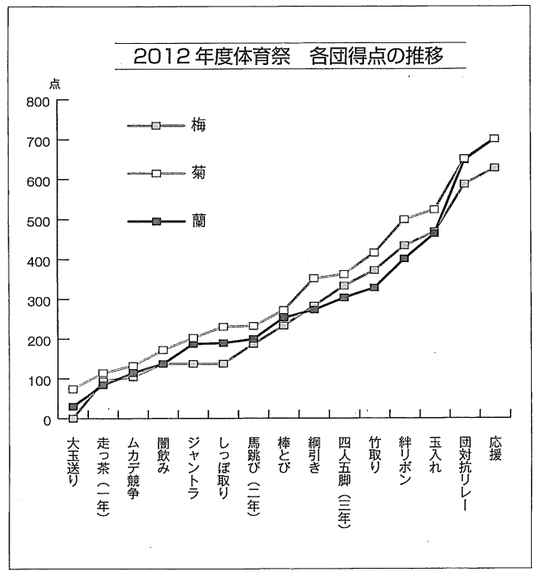
今年度は二年生学年競技の馬跳びリレーで、審判の判定について物言いが出る騒ぎが起きた。規定では、馬と馬の間は歩いてはならないが、リズムを整えるために両足でワンバウンドすることは認められていた。この「ワンバウンド」の定義がどこまでかという解釈に各団それぞれ一人ずつ。本番で蘭は、菊と梅の馬の間隔がかなり狭くなっていたのに、かつ菊はかなり減点されたのに梅に減点が無かったことを不審に思い、体育祭実行委員長に抗議した。実際に判定した審判と審判係長が呼ばれ協議したところ、菊は足ぎつ進むという「歩き」行為が確認されたが、梅は間隔は広いものの「両足」で跳んでいたため判定は正当とされ、抗議は退けられた。

審判係による「体育祭ルールブック」を読むと、減点対象となるルールには、意図するものによって以下の三つのタイプがあることが分かる。①安全性、②公平性、③進行上の円滑性である。一つ目はたとえばアクセサリーの禁止や水着競争での長ズボン着用、②はしっぱ取りのしっぽの長さ、③は出欠チェックや応援禁止だ。

とりわけ二つ目の公平性に関わるルールは、競技でいわゆる「抜け道」が開発されないように、ありとあらゆる可能性を考慮して規定されている。よってぱっと見には「箸の上げ下ろし」と思えるようなルールもあり、何気なくやったことで減点になってしまうことがある。ルールブックは体育祭前に全員に配布され、口頭での説明もされるので「知らなかった」ということはできないのである。

減点の問題が複雑になっている理由は他にもある。ルール違反は基本的に二点ずつ減点となるが、競技によっては五点、一〇点のものがあり、瞬時に判定して記録する審判係や、短い時間にたくさん計算しなければならない記録係にとって、ミスをするもとになるかもしれない。

選手が出場競技のルールをしっかり確認することはもちろん、規定する側もルールのスリム化を図る必要がありそうだ。



生活委員会「半ギレ」 団席に新案

生活委員会がひそかに怒っている。

体育祭が終わって団席の椅子を校庭から校舎内に戻す際、昇降口で生活委員が椅子の足を一つ一つ雑巾で拭いてくれる。砂をふき取ることが本来の目的だが、それを邪魔しているのが大多数の椅子の足にへばりついている埃だ。「外に出す前に埃を取ってくれるようにお願いしているのですが、雑巾でとれるのはゆより埃が断然多いんです。」雑用になっている気がして意味があまり感じられないと話すのは、生活委員長の二年蘭組八保文乃さんだ。「半ギレ」だという生活委員会では、校庭に出す時に椅子の足に埃がついていたら減点にしては、という案も出ているという。

拭かなくていいように、ガムテープをカバー代わりに椅子の足に貼る案が毎年出るそうだが、粘着が残るという理由から先生方に却下されてしまうらしい。

団席は体育祭中の使用率が高くなく、どちらかというと荷物置きとして存在している感がある。椅子だと持ち運びが大変なため、歌物にすればいいのではないかとも考えられている。プルーシートを用意するか、各自でレジャーシートなどを持参するとの案だ。

生活委員会が業を煮やしているのは、体育祭のことだけではない。普段から掃除ごみの分別、ごみ出しを当たり前のようにやってほしいと、委員らは切に訴える。

夏休みが明けても暑い日は続く。生活委員たちの心の叫びをしかと自らに言い聞かせようではないか。「ごみ箱、見て見ぬふりをしないでください！」

UMEHANAsの五人にインタビューを行った。一見おとなしい雰囲気の彼女たちだが、ことSTOCKリーグに関しては並々ならぬ熱い思いがあるようだ。ニューヨークでの研修旅行のことも伺った。（回答者の名前は敬称略）

―一番苦労したことは何ですか？

井上　企業に電話すること、メールすることと、点数化して投資企業を決めることです。地道な作業でした。

本橋　一つに絞れないくらい色々大変でした。障害者は難しい立場なので、言葉の表現に気をつかいました。がんばって書いたレポートの字数を、提出前に削るのも大変でした。

―企業訪問で印象に残っていることを教えて下さい。

末吉　それぞれの企業で取り組み方が違うことが実感できた。自分たちの仕事に誇りを持っているんだなと思った。

荒木　エフピコは工場見学だったため、実際に働いている人のそばで、機械の音が大きいとかスイッチのボタンを押すとか、見て、障害者が働いている姿を実際に見て、障害者が企業の戦力になることを実感しました。経営者や社員が働きたいと思う人が働くのは当たり前のことであるなかでしっかりとした考えを持っていて、頼もしく感じました。

―「はひふへほの法則」は誰のアイデアでしたか？

太田原　五人で考え出したアイデアです。きっかけはクラスメイトが「ひ～っ」と言っているのを見て、他の「ふぅ～ん」や「へぇ～！」も言ってみたことだった気がします。

―レポートが完成した時、手応えはありましたか？

本橋　最後の最後まで字数を削ったり、図表の直しをしたりしていて、特にリーダーの太田原さんは家に持ち帰ったりしていたので、しめ切りに間に合うかと焦っていました。なので、手応えはありませんでした！

荒木　テーマ設定の背景の文章ができ、考察の内容が決まった時、いい線までいってほしいという気持ちは高まりましたが、経済のコンテストなのに内容があまり経済的ではなかったので、不安でした。

―優勝を知った時の気持ちを教えて下さい。

本橋　信じられませんでした。五人とも絶叫したり硬直したり……。「何で？　えどっきり？」みたいな感じでした。でも状況が理解できてくると喜びがこみ上げてきて、涙があふれました。その後は五人とも親に電話で報告しました。

太田原　本当に信じられない気持ちでした。ノミネートされた時点で「障害者」というテーマの私たちのレポートをさらに多くの大人にじっくり読んでもらえると思い、嬉しい気持ちだったのですが、「優勝」は私たちにとって「さらにもっと多くの人にレポートを読んでもらうことで障害者雇用のことを伝えていく」という使命のようなものを与えられたのだと感じています。

―プレゼンで工夫したのはどういう点ですか？

井上　障害者雇用のこと、私たちが頑張った会社選びと訪問のこと……を、本当に伝えたいことのみにしぼった。パワーポイントで、オリジナルの図化をしてわかりやすくした。前を向いて、にこにこしようと努力した。

末吉　私たちが一番伝えたいことは何か、そしてそれを聞く人の心に響かせるには…ということをよく考えました。

―藤澤先生にお伝えしたいことはありますか？

太田原　静かな熱い藤澤先生に出会えて良かったです。藤澤先生と出会い、STOCKリーグに参加したことは一生忘れない。この感謝の気持ちを表すために自分なりの形で社会に貢献したいと思います。

末吉　今までありがとうございました。先生のご指導のおかげでいろいろな経験ができました。先生の意外な一面を知ったり、いろんなお話ができてとても楽しかったです！

荒木　私にとって身近でなかった経済を学び、チームでとことん話し合い、考え、一つのレポートを作るという経験ができたことはとてもためになりました。将来の道も視野広がりました。参加する機会を与えて下さり、ありがとうございました。ぜひお茶高に戻って、ニューヨークで学んだことをより多くの高校生に伝えて下さい！

―表彰式、懇親会の感想は？

本橋　日経新聞、野村ホールディングス、審査員、STOCKリーグ参加者…など様々な方とお話できて、経済、国際社会、働くということなど…、いろいろなお話を聞くことができて勉強になりました。

井上　他の人たちのやる気で、審査員、野村の方々のお言葉が強く残っています。

―審査員の方々と話して、どうでしたか？

荒木　私たちのレポートを読んで涙を流して下さった方が話しかけて下さり、うれしかったです。

井上　やはり経済との結びつきが足りなかった…とわかりました。「はひふへほ」という視点が良いと言われて、どうして選ばれたのかがわかったのでほっとした。自信になりました。

―ニューヨーク研修旅行で一番印象に残ったことは？

太田原　私たちはこの旅行でAmericanaroodはもちろん、中華料理や韓国料理など様々なお店に連れていってもらい、充実した食生活をしていました。その反面、街を歩いているとゴミ箱をあさっていたり、路上で生活したりしている人をたくさん見かけました。貧困や身分の格差問題はよく授業でも扱うけれど、これほどまでに実感したことは初めてで、衝撃的でした。

末吉　文化の違いを感じた。積極的に話しかけてくれるし、いろんな国の人がいた。あと、英語は大切だと痛感した。

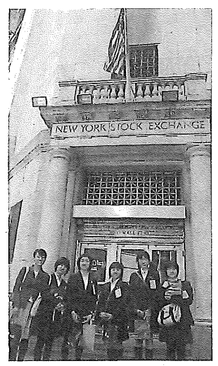
井上　文章で伝える力が、前よりは向上した。時間の使い方がうまくなった。企業は、ただ利益を求めるだけではいけないと思うようになった。障害者だけでなく、いろいろな人に目を向けようと思った。

荒木　新聞の経済面にも目を通すようになりました。また、働くのは辛そうだという考えが変わりました。電車の中で「この人は生き生きと働いているかな？」と思うことが多くなりました。

末吉　会社は人を幸せに、元気にする力がある。ある気さえあれば、努力もできるし、生き生きと働けて充実した人生を送れることがわかった。

本橋　街を歩いていて、障害者の方や困っている人の姿がより目に止まるようになったと思います。まだ行動に移せていないけど、本当に困っている人がいたら手をさしのべたいと思っています。

太田原　障害者という視点で社会を考えてみて、普段の生活での自分の視野が広がった気がします。高校生として気付けることはまだまだたくさんあるし、教科の勉強だけでなくもっと日本社会のこと世界のことをたくさん学んでいきたいと強く思うようになりました。世界で貧困や食料の問題に困っている人の助けになりたいという将来の夢に対して、どのような形でその解決に携わっていきたいか、という視野も強くなりました！



日経STOCKリーグNY研修旅行に同行して

藤澤　英子

一昨年、昨年度の日経STOCKリーグには、のべ一〇チーム約四〇人のお茶高生が参加した。昨年度は見事、一年生チームが「障害者雇用」をテーマとするレポートをまとめ、見事に最優秀賞を受賞した。この受賞は、参加した全員で獲得した賞だ、と心底思っている。（日経STOCKリーグの詳細は、では説明しないが、興味を持った一年生はぜひインターネットで検索してほしい！）

さて、二〇一二年三月二七日に受賞が決まり、それから駆け抜けるように一カ月間だった。夢の中にいたような気がいまだにしている。三月一一日、日本経済新聞社での表彰式とプレゼンテーション。一六日、学校での表彰式とプレゼン。一八日～三日目は副賞としてニューヨークへ六日間の研修旅行にチームメンバーと私の六人が招待された。帰国後も三〇日に野村證券での祝賀交流会。それ以降も取材や勉強会参加など貴重な機会をいただいている。ここではNY研修旅行で感じたこと、考えたことを皆に伝えたい。

世界の金融の中心地はすごかった。金融機関のビル群、様々な人種のビジネスマン・ビジネスウーマン。人、車、時間の流れが東京以上に速く感じられた。一方で、現在のアメリカ経済を物語る光景もみられた。昨年「ウォール街を占拠せよ」と所得格差是正を訴えるデモがはじまったウォール街の公園を見た。まだ座り込みをしている人々がいた。そして、ギュウギュウにひしめき合う高層ビル群にぽっかりと空いた九・一一テロの跡地、グラウンドゼロ。テロが起きた時のことを、眼下に広がる跡地を見ながら現地の方からお話を聴き、私たちも全員が息をのんだ。多くの人々がパニックに陥り、ワールドトレードセンタービルの高層階から次々に飛び降りたということ。テロの爆風で、その時私たちが居たビルの窓ガラスが全て吹き飛んだということ。現地を訪れ自分の目で見て、聴いたことは、心身全体に沁みわたる気がした。

六日間でNY証券取引所、三菱商事、野村ホールディングス、ニューヨーク国連本部等を訪問し、世界で活躍する方々からお話を伺った。お話に共通していることがあった。それは、「日本人が内向きになっている。だからみんなの世代にはどんどん世界に出てほしいという思いだった。世界の中で日本の力が弱っている。NYで活躍する日本人はこれまでに一番減っているということ。それは、大学やビジネススクールなどの留学生だけではなく、NY国連本部の職員、企業で働く日本人の数の減少だ。その分、中国、インド、そして韓国の人々の活躍が増えている。「海外に出る一つの壁が日本人には英語だが、間違えを怒れず、恥ずかしがって英語を使ってほしい。日本人の考えているレベルは非常に高い。そして恥をさらして伝わらない」とおっしゃっていた。その思いには切迫するものが感じられた。そして学生時代にすべきことをあらゆるところで尋ねた。以下のいくつかに集約される。勉強でもそれ以外でも何か一つのことに打ち込む経験。英語（やっていて絶対に損はない）。多岐にわたる分野の読書をし、自分なりの問題意識を持つ。大切な友人をつくること（大人になってつくることは難しい）。

日本国内の就職率が低下しているといっても世界から目を向ければ、そこまで低くはないはずだ。大きな夢、挑戦する心をもち、努力し続けることで、世界で活躍することは実現するのだと思う。数一〇年後の日本を考えると、今の若者が日本でぬくぬくしている場合ではないなと私は強く感じた。お茶高生の好奇心、挑戦する実行力があれば、世界に貢献・活躍する人に必ずなれるはずだと確信した。ぜひ視点を変えて、世界から日本をみることをはじめてほしい。

機会があれば、UMEHANAs五人それぞれの研修旅行経験を直接聴いて、今の自分に直接話を聴くことが、一番学ぶことができると今回経験したからだ。